

高校教育の根底にある同志社の精神

―多様な価値観の中で人は生（活）きた存在となる―

奨励	小西 二巳夫（こにし・ふみお）
奨励者紹介	敬和学園高等学校校長 日本キリスト教団牧師

はじめに

新潟の敬和学園という高校にあります小西二巳夫といいます。しばらくの間お話をさせていただきます。私は二十四歳で同志社の神学部へ一回生から入りました。それから大学院も含めて八年間在籍させていただきました。学校が好き、学問が好きということではありませんでした。結果的に八年だったということです。入学した年齢も年齢でしたので、二回生で結婚をして、三回生で子どもが生まれて、大学の卒業式には子どもが妻に連れられて出席しました。その間、生活は塾をしながら、そのために買った家のローンを払いながら通うという生活をしておりました。そのように話しますと、まじめ一方の人間のように思われがちですが、すべてにおいて「まあまあ」「ほどほど」しかありませんでした。牧師になったのも三十歳を過ぎて、どんどん可能性がなくなって、最後に残ったのが牧師しかなかったわけです。けれど、それはそういう形で神さまが導いて下さったのだと、ある時気づかされました。八年間在籍した同志社で何を学んだか、今回このような形でこうした場所に立たせていただくにあたって、あらためて考えてみました。残念ながら「これです」と胸を張って言えるものはありませんが、たくさんの出会いの体験はさせてもらいました。人との出会い、組織・共同体との出会い、神との出会い、そして自分との出会い。そうしたことから考えて、今に至る、人としての生き方、方向性、そして価値観、それらを学んだと言えます。そういう意味でありがたい時間を過ごさせていただいたと感謝しています。

そこで、今日は私が同志社で出会ったキリスト教の多様な価値観を中心に話を展開させていただきます。

私が二十四歳で同志社へ一回生から入ろうと思ったきっかけは、その前に過ごしたフランスでの出会いによります。私は二十一歳のときにフランスに行きました。留学といえば格好がいいのですが、実態はそういうことではなく、今から三十五年以上前のことですので、たとえ中身はどうであろうと、留学ということによってそれなりの格好をつけようと思ったのです。フランスの学校で一人の日本人に出会いました。その人はある社会福祉法人の仕事をされていて一年間フランスで研修するためにやってきた人でした。この人との出会いを通して社会福祉の分野に関心が湧き、それが同志社の神学部に入ってもう一度学んでみようということにつながりました。まじめな人でしたが、彼は劇画が好きで特に『ゴルゴ13』という劇画の大ファンで、フランスにまで数十巻の単行本を持ってきていました。私も時々彼から『ゴルゴ13』を借りては読んでいました。さらにフランスに行って二年目の夏休みのことです。ある大学の夏期講習に出てひと夏過ごしたときのことです。その講習で同志社の学生と知りあいました。彼の遠縁に「さいとうたかを」という人がいるとのことでした。「さいとうたかを」は何と『ゴルゴ13』の作者だったのです。

今回スピリット・ウィークでお話をさせていただくにあたって、真っ先に思い出したのが、私が同志社に入る前後のこと、そして『ゴルゴ13』にまつわる出来事でした。

『ゴルゴ13』という劇画、若いみなさんには馴染みがないだろうと思います。連載は三十九年前に始まりました。出された単行本で一四〇巻近くになります。ゴルゴ13というのは主人公のニックネームです。デューク・トウゴーというのがどうやら本名のようなです。彼は世界的な殺し屋です。プロフィールは次のようなものです。身長一八二センチ、体重八〇キロ、血液型A型、東洋人であるが国籍は不明。十八か国語を話すことができるとあります。依頼を受けた五〇〇件近い仕事はすべてこなしている。完璧主義者であり、物事の切り替えにすぐれている。性格は几帳面、神経質、慎重、そして臆病。以上がゴルゴ13の主なプロフィールです。これらのことからわかるのは、ゴルゴ13は抜群の体力と不利な状況を乗り越える頭脳をもって、勝負に負けたことがないことです。私がゴルゴ13に興味を惹かれるようになった理由の一つは、その時その時の世界情勢が反映されているからです。毎回のストーリーは時代の先端を話題にしたものが多くあります。しばらく前のことで言えば、米国はなぜイラクに戦争を仕掛けたのか。

そのイラクでまさに核兵器と言える劣化ウラン弾が使われていること、そのため白血病やガンにかかる子どもや米国の兵士がたくさんいるということ。米国の大統領ブッシュは正義の戦いと言っているが、実は裏では石油の利権をめぐっての暗躍があつてのこと。あるいは鳥インフルエンザに関する基本的な知識を、私は『ゴルゴ13』を通してあらためて教えられました。その『ゴルゴ13』ですが、実はキリスト教、聖書と「ヘー」というような関係があります。まず、ゴルゴ13という呼び名の由来はイエス・キリストの十字架からきています。イエス・キリストはゴルゴダの丘で十字架にかかって死にました。十字架にかけられたのは、弟子たちが裏切ったからです。

そこから、そのゴルゴダの丘でイエスを十字架にかけて殺した十三番目の男、ゴルゴダ十三番目、ゴルゴ13となったわけです。第一三五巻のタイトルはズバリ「涙するイエス」です。十三という数字は讃美歌の番号でもあります。讃美歌一三番は、依頼人がゴルゴ13に仕事を頼むときの手続きに必要な讃美歌なのです。依頼人はまずアトランタ州立刑務所に入っている囚人のマークス・モンゴメリーに手紙を書きます。マークスは手紙を受けるとNBCラジオの「タバの祈り」とCBSラジオの「宗教の時間」に讃美歌一三番をリクエストします。これを聞いたゴルゴ13が依頼人と接触をするというわけです。考えてみてください。テレビやラジオの宗教の時間というのは朝早いのがほとんどです。ということは、殺し屋のゴルゴ13は早起きおじさんで、聖書・宗教番組のリスナーファンだということになりませんか。ゴルゴ13の性格は先ほどのプロフィールからもわかりますが、大変用心深いのです。こわがりです。その彼が依頼人と接触をするときや普段の生活で絶対にしないことがあります。それは自分の後ろ側に人を立たせないということです。絶対相手に背中を見せないのです。もし誰かが自分の後ろに立ったら、たとえそれが子どもや女性であっても容赦しません。あつという間に倒してしまいます。ゴルゴ13は背中を見せることを極端にこわがっているということです。なぜでしょうか。それは、背中は無防備であつて、自分の力では守れないからです。ゴルゴ13は相手に背中を見せたら勝つことは出来ないことを知っているのです。言い方を換えれば、ゴルゴ13は決して背中が勝負しないのです。ところが、ゴルゴ13と関係の深い聖書には、まるで逆の背中が勝負をした人が登場します。

無防備に背中を相手に見せながら勝負した人がいます。それが誰かと言いましたら、皮肉にも、呼び名の由来や讃美歌一三番と大いに関係があるイエス・キリストです。

ヨハネによる福音書 七章五三節―八章一一節 姦通の女の話

ヨハネによる福音書七章五三節から八章一一節に「姦通の女」という見出しの話が載っています。読んでいただきますと、どういう話がお分かりになると思いますが、少し解説を加えさせていただきます。あるとき、今風の言葉を使うなら、不倫の現場でつかまった一人の女性がイエスのところに連れてこられました。彼女がイエスのところに連れてこられた目的は、彼女に自分の罪を償わせるためではありませんでした。この女性をおとりにイエスを落としいれるためでした。ですから律法学者とよばれる聖書・宗教の専門家は、イエスに意地の悪い質問をしました。その質問というのは、不倫をした女性は昔からのきまりによって、みんなで石を投げて、打ち殺すことになっているが、あなたならどうする、でした。律法学者が、石を投げて殺したいのは女性ではなくイエスでした。ここでもし、イエスが昔からのきまりの通り、石で打ち殺すべきた、モーセの律法に従うべきだと言えば、罪人を赦す神を伝えていた日頃の言葉とは矛盾することと言ったと受け取られることになります。冷たい人だ、がっかりしたと、見物人からブーイングを受けるでしょう。

逆に、石で打ち殺してはいけないと言えば、昔からのきまりを破ることになります。それこそ律法学者の思うつぼです。女性は不倫の現場で捕まりましたから、それを赦せというのは、何をしてもいいのかということになり、人びとから反感を買うことになります。この女性に関して、自分の考えを言葉にすることとは、たとえどのような答えであっても、律法という掟を冒涇するもの、神様を冒涇するものとして、イエス自身が罪人として石打の刑に処せられることになりました。つまりこの質問は律法学者たちのイエスを陥れる策略以外の何ものとは当然です。ですから、そこに集まった人びとは固唾を飲んでイエスの返事を待っていました。ところが、イエスは律法学者の質問に所知らぬ態度で、彼らに背中を見せながら、指で地面に何かを書き始めたのです。イエスは地面に何を書き始めたのでしょうか。何を書いたかそれはあまり問題ではないと思います。問題はその態度でした。律法学者は腹が立ったでしょう。

ここで徹底的に問い詰めてやろうと思って、これ以上はないという質問をしたのです。それなのに、自分の目の前にいるイエスは質問に答えないで、まるで無視をするかのように手遊びをしているわけです。いわゆるシコトされたのです。それは思ひもかけない反応だったのではないのでしょうか。ですから律法学者は慌ててさらに声高に問い詰めました。するとイエスは言いました。「あなたたちの中で、これまで一度も罪を犯したことがない人が、まず、この女に石をなげなさい」。それだけを言うと、再び背中を向けて地面に何かを書き続けたのです。この一言が律法学者だけでなく、そこに集まっていた人びと、特に何が起るかを楽しみにしていた人びと、そして女性の不倫とは関係ない、と第三者的な立場にいた人びとを当事者にしたのです。人びとは問題が突然自分たちのほうに振られたのです。ニタニタ出来なくなったでしょう。してやられた、しまったと思ったでしょう。というのは、生まれてから一度も罪を犯したことがない人間などいないことなど、わかっていたからです。石を投げるのを楽しみにしていた人、石打によってその女性が苦しむのを楽しみにしていた人たちは、イエスのこの一言によって、自分が石で打たれたような嫌な気分になったのではないのでしょうか。そういう気分になったら、いたたまれなくなります。少しでも早くその場所から去りたいのは当然です。一人ひとりとその場を無言で立ち去っていきます。その人びとを見ながら、律法学者たちも自分たちが女を道具にしてイエスを責めようとしたうしろめたさをはっきりさせられて、苦々しく思いながら立ち去るしかありませんでした。場面はそこで終わりではありませんでした。イエスは残された女性に対して「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。誰もあなたを罪に定めなかったのか。」と言われ、さらに「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と話されました。ここは大事なフォローです。みんないなくなったということは、彼女を裁く人がいなくなったということです。

イエスの人間観・価値観

本来ならその役目を果たすべき律法学者はその役目を放棄していなくなってしまうのです。裁くのは必ずしも悪いことではありません。いわゆるお裁きは、そのお裁きでもって罪を赦すという事でもあります。もし誰かがその役目をしなければ、彼女は一生自分の罪を背負って苦しまなければならないということでもあります。だからイエスは「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と言ったのです。誰もあなたを裁かないのか、それでは私が裁いてあげよう。大岡越前守、遠山の金さんがお白州で、今回の一件、情状酌量により無罪放免とする、というようなものです。イエスは彼女の罪の赦しを宣言しました。

それによって、彼女は赦されたものとしての人生を歩めるようになったわけです。

気まずくこの場を立ち去っていった人びとも、不倫の女性がどうなったかには関心があつたはずです。そして、イエスが女性に言われた言葉を知ることになります。イエスの赦しの言葉を聞いた人びとは、ホッとして、解放されたのではないのでしょうか。しばらくして、よくよく考えてみたときに、イエスが律法学者の問いに対して、黙って地面に何かを書くという姿勢と態度が、じつは自分たちにも向けられた赦しと解放、究極の優しさ、いたわりであったことに、気づくことになりました。イエスが律法学者の「言葉の暴力」に対して「背」中」で勝負をされることによって、誰もがもっている弱さを、そしてこの世界にさまざまな形で存在する弱い立場の人を大切にする、そのところから人間本来の生き方とあるべき平和な世界が作られることを示されたといえます。ここにイエスの考える、そしてキリスト教が大切にする人間観、価値観が示されています。そのキリスト教が考える人間観、生き方、価値観についてもう少し違う角度から考えたいと思います。

カルト宗教に入る大学生

日本の大学生の傾向として、いわゆるカルト宗教に入りやすいことがあります。たとえば文鮮明を教祖とする統一協会にはこの四十年間日本の大学生、しかもいわゆる一流大学と呼ばれる学校の学生が絶え間なく入り、周囲の者が気づいたときにはとんでもない事態になっていたということが起こっています。オウム真理教、最近では「摂理」というものもあります。そうしたカルト宗教が教えているのは実に幼稚なレベルの内容です。ところが知的レベルが高いはずの大学生が、いとも簡単にその幼稚な話を信じてしまうのです。他の国ではあまり考えられないことです。なぜ日本の大学生はそうした幼稚な考えを真理として受け入れてしまうのか、その大きな要因として、小さいときから狭い価値観のなかでずっと勉強させられてきていること、そしていろいろなことを教えられている一方で、基本的に教えられていないことがあると言われています。いったい何を十分に教えられていないのでしょうか。何をしっかり学んでいないのでしょうか。

ファット・イズ・ユア・レリジョン？

フィリピンという国があります。この国は国民の九〇パーセントがクリスチャンです。ある日本のキリスト教大学の学生がボランティアでフィリピンに行き、ホームステイ先のおばさんに次のような質問をされました。ファット・イズ・ユア・レリジョン？

学生は直訳して「あなたの宗教は何ですか」と聞かれているのだから、自分には信じている具体的な宗教はないからと「ノーレリジョン」と答えました。ところがフィリピンの人は変な顔をしました。なぜかといいますと、フィリピンでは宗教というのは神の存在を信じる云々レベルにとどまらず、そのままその人がどのような人生観、世界観、価値観をもっているかを聞いていることでもあったのです。「あなたは何を大切に考えて生きていますか。あなたの価値観は何ですか」とホームステイ先の人は尋ねたかったのです。やりとりをすることによって質問の意図がわかった大学生は、私の人生観は、価値観はこれこれこうです。と答えることができたかといえば、そういうことについては深く考えるような教育、育てられ方はしてこなかったので、ますます何も言えなかったというのです。難しい入学試験に勝ち残った知的レベルの高いはずの大学生が簡単にカルト宗教に入るのは、そこで生き方を問われて、それまで深く考えることもなかったために答えるにつまって、どうしたらいいかわからなくなって、そこにカルト宗教を信じる生き方を示されて、そうだこれだということになって、何の疑いもなしにそのまままっしぐら、ということになるわけです。

そもそも教育の目的とは何でしょうか。テストの成績と偏差値を上げて、より大きく、より強くさせること、そういう力をもたせること、資格や財産をもたせることに教育の目的があるのでしょうか。教育の目的は一九四七年に作られた教育基本法を見るとよくわかります。教育の目的が書かれた第一条は次のように始まります。「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」。わかりやすく言えば、教育は一人の人が個人的にも社会的にもしっかりと成長した人間になってもらうために行うものであるということです。すべてにおいて人格を育て豊かにすることが優先されなければならないということです。ところが、実際にはそうはなっておらず、偏差値を上げ、受験を勝ち抜くことに重点が置かれている、そこに問題があるわけですから。

所有価値と存在価値

「個人の価値を尊重して」ということですが、価値観は押し付けられるものではなく、認められるべきもの、守られるべきものであるということです。これを別の言葉で言うならば「所有価値」に対して「存在価値」です。何かをもっているから価値があるのではなく、何かができるから価値があるのでもなく、その人が今そこに存在していること自体に価値があるということです。キリスト教の中心的な考え方は、存在価値を徹底的に大切にすることにあります。そこで私が今働いています新潟の高校、敬和学園高校では存在価値を中心においた教育を行っています。「価値観の多様性」、「多様な価値観」というのがあります。所有価値という狭い価値観に対して、それ以外にいろいろな価値観があるかと言いましたら、実際はそうではないのです。「多様な価値観」、「価値観の多様性」というのを一言で言えば、弱さ・小ささを切り捨てないということなのです。つまり、存在にこそ意味と価値があるという、存在価値そのもののことなのです。敬和学園に入学してくる子どもたちのなかに中学までの学校生活で、勉強ができないこと、いじめなどで相当苦しんだ子どもたちも少なくはありません。

そして、高校ではそういう生活を二度と味わいたくないという思いで入学してくる生徒がいます。ところが、そのような価値観から逃れたくて、敬和学園に入学してきたにもかかわらず、その子ども自身が、多様な価値観をもっているかと言いましたら、案外そうではない場合が多いのです。人を切り捨てるような価値観でもって自分もまた同級生や周囲を見るといいのですが、それではないのです。しかもたいていはそのことに気がついていません。

卒業生の言葉から

そのことを、卒業を前にした、ある三年生の言葉がよく表しています。彼女は文集に次のように書きました。「入試の面接で三年間の欠席日数について尋ねられたので、中学でのいじめと不登校の経験を交えた理由を正直に話し、敬和生活のなかで変化していった気持ちも話した。すると面接官から『乗り越えたんですね』と言われた。中学生のときに関心があつたのは成績だった。学校のテストが何点、成績表に五は何個、四は何個だった。塾での模試でも偏差値はいくつだ、順位はどうだ。そんなことしか考えてなかった。だから敬和に入学した当初は驚きと戸惑いの連続だった。まず驚いたことは、他の高校より生徒の成績の幅が広いことだ。中学校の数学、英語ができない、漢字が読めない。私は信じられなかった。同じ高校生とは思えなかった。

次に驚いたことは、敬和の定期テストの結果表の出し方だった。一〇〇点取れば偏差値も一〇〇。そして授業を上級、中級、基礎と分け、テストも違ったものを受けさせているにもかかわらず、順位の出し方はレベルに関係なく、点数のみで同じ土俵で比べる。基礎で一〇〇点取れば、上級で九十九点取るより上扱いである。悔しさのあまり何度泣きながら担任に訴えたことか・・・」。少し説明しますと、英語は上級・中級・基礎の三つのレベルに分けています。上級では二週間に一回程度テストがあります。一四〇点が満点です。必死に勉強する必要があります。それに対して基礎クラスには、英語嫌い、苦手、アルファベットは見たくない、という子どももいるわけです。少しがんばればテストで相当いい点数をとることができます。そういうレベルが違うにもかかわらず、五段階評価で同じように評価するのはおかしいということです。基礎クラスはレベルが低いのだから、どんなによい点数をとっても上級でいえさせいけい三程度なのだから、換算して評価をするべきだというわけです。この生徒の受けとめ方、考え方は間違っているわけではありません。一理あります。たとえば高校は学力によって分けられランク付けされています。高校選びも学力に見合うところに決めさせるのが一般的でしょう。それが当たり前の価値観で育ってきた子どもが敬和学園に入ると戸惑うわけです。この生徒は自分自身中学まで点数がすべて、成績のよいことがすべてに勝る、という価値観のなかで苦しみ不登校も体験したわけです。それにもかかわらず、状況や立場が変われば、周囲の同級生や学校を同じような見方しかできないということなのです。

何のために学ぶのか

上級で必死に勉強するよりは中級で楽にやって、いい成績をとるほうが得だと考える生徒が出てきても不思議ではありません。ある意味もっともです。もしどうしてもそうしたいというのなら教師は止めないでしょう。そこで忘れてはならないのは何のために学んでいるかということです。点数のためなのか、他人から評価してもらうためなのか、ということです。違うはずですが、勉強する目的、学が目的は教育基本法にもありますように、人格の完成であり、平和的な国家及び社会の形成者になるためであり、真理と正義を愛することのできる人になること、個人の価値を尊重できる人、責任をもった生き方ができる人、自主的精神に充ちた人になるためである、ということです。それが本当の意味で自分のために勉強することです。

わたしが入学礼拝で必ず話すことがあります。あなたは選ばれて敬和学園に入学したということ。敬和学園で三年間の「自分探し」をするために選ばれたこと。敬和学園は神があなたを選んだと考える学校だということ。神様が選んだのは他の人と比べて能力があるからではない。強いからでもない。立派な人だからでもない。その理由は人間にはわからない。理由のわからない選ぴをキリスト教は「神の愛」と呼んでいるということ。

敬和学園を受け入れる＝多様な価値観を身につける

敬和学園はそういう意識で一人ひとりを受け入れるわけですが、同時にそういう敬和学園を一人ひとりが自分のなかで受け入れてほしいと考えています。敬和学園を受け入れるというのは、敬和学園が大事にしている価値観を受け入れるということです。それを三年間かけて行った先ほどの生徒が続きに次のように書いています。「しかし今の私は変わった。敬和の三年間が私にさまざまなことを教えてくれた。数学が苦手でも敬語が得意、勉強ができなくても体操選手並みにスポーツ万能、いつも笑顔で誰にでも優しい、廊下のごみを拾える。多様な多様な人がいることを知った。友達を尊敬するようになった。私の人に対する見方と自分自身に対する見方が変わった。学力でしか人を判断できなかった自分が恥ずかしくなった。テストへの意欲も人と比べることより、自分を向上させようと思うようになったら順位や偏差値は気にならなくなった。少し自分が成長した気がした。敬和は普通の学校ではない。キャラの濃い生徒が多い。卒業生はいつまでも遊びに来る。受験生に模試を強制しない。授業中に海に行く。朝、どんなにバスが遅れても授業時間を削って礼拝を優先する。他校の生徒には通用しない授業や行事が多い。書き出したらきりがなし。私立のくせになんか地味だし（笑）。敬和に入学したことを後悔した時期もあった。しかし、今では敬和が好きだ。敬和で出会ったたくさんの友だち、先生、経験、今まで知らなかった自分が好きだ。

敬和に入学したことを、卒業することを誇りに思う。これがわたしの『乗り越えた』事だったのかもしれない。この生徒は親しみをこめて「敬和学園は普通の学校ではない。キャラの濃い生徒が多い」と言っていますが、本来学校というのはそういう場所ではないのでしょうか。私たちは敬和学園をごく普通の高校だと思っていますが、世の中全体がそうになっていないから、どうしても普通ではないということになってしまいます。キャラが濃いというのは自分の個性をしっかり出している、出せているということです。個性を出して何が悪いのでしょうか。それを自分の内側に閉じ込めなければならない場所に学校になっているから、学校が自分の居場所

なくなる人が多くいるわけです。最後に書いている「乗り越えた」というのは、まさに狭い価値観で心も体もガチガチであったことから、いわゆる存在価値をもつことのできる人へ変わったということです。

多様な価値観が自分を活かし、平和を創りだす

この卒業生の言葉から、そして、聖書に書かれているイエス・キリストの一人の女とのかかわり方によって、生きることにおいて、まず何を大切にしなければならないかがはっきりと示されています。それは弱さや小さいことを切り捨てるのではなく、なくてはならないものとする事です。弱さ小ささも大切な個性であるということです。

そういう価値観をもって存在価値といいます。その存在価値をしっかりとつことによって、まず自らが自分を縛り苦しめる固定的な価値観から解放されるのです。そしてその価値観を共有する共同体を作っていくことが、この世の中において平和を作り出すと、私は信じております。そこに一人ひとりが生きる使命があると思います。

今回お話しさせていただくに当たって、あらためてわかったこと、それは私自身が信じる考え方の出発点となっているのが、同志社でのいくつもの出会いであったということです。その信じるところに立って、今、高校教育に励んでいます。

二〇〇九年十一月四日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録